

③ みつけて・ためして、とことん遊ぼう

このビジョンでは、乳幼児期の子どもにとっての「遊び」を次のように考えています。

- ・自ら進んで「やってみよう」と思うもの
- ・楽しくて面白いもの
- ・自分の発想やアイデアを試せるもの
- ・夢中になって「遊び込める」もの

幼児教育・保育において「遊び」が大切な理由は、このような遊びを通して、子どもが自分のやりたいことに向けて活動する力、人とうまく関わる力、感情をコントロールする力など、生涯を通じて生きる力の基礎となる「根っこ」としての内面の力を身につけていくからです。乳幼児期に身につけた内面の力は、「後伸び（あとのび）する力」ともいわれ、その後の「自ら学ぶ意欲」や「生きる力」の土台となり、小学校や中学校などでの学びにつながっていきます。

こうしたことから、

「とことん遊べる環境をつくる」

「遊びを見守り・支える」

ことを大切にする幼児教育・保育に取り組みます。



(1) とことん遊べる環境をつくる

ア 安心できる守られた環境

子どもは周囲の環境にとっても敏感であるとともに、その環境に関わりながら様々なことを学んでいきます。子どもの発達を理解し、危険や不安のない「守られた」環境を整えることで、子どもは「やってみたい」と思う「遊び」を見つけ、自分の発想やアイデアを試すことができます。

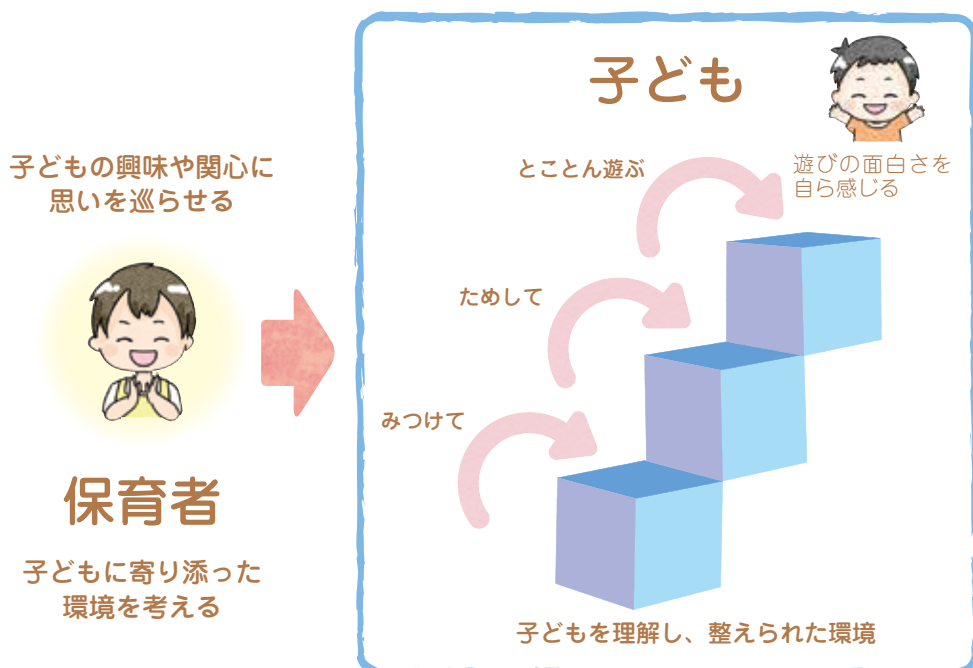
また、子どもが「遊び」に熱中するには、「何度でもチャレンジできる」という「安心」も必要です。安心の基本は、保育者と子どもが愛情のこもった信頼関係で結ばれていることです。その信頼関係は、保育者が日頃から、子どもに共感しながら関わっていくことで育まれます。同時に子どもは、「先生が見てくれて嬉しい。」という気持ちにもなり、こうした気持ちの積み重ねが自己肯定感につながっていきます。



イ 子どもに寄り添った環境

子どもは、心も体もそれぞれのペースで成長します。また、それぞれの個性や生活における経験などによって、同じ月齢・年齢の子どもであっても興味や関心の対象に個人差が見られます。保育者は担当する子どもの発達や興味・関心を理解して環境を整えることが必要です。整えられた環境に子どもが主体的に関わり、「遊び」に必要な物を考え、作り、使って遊ぶことで、子どもは「遊び」の面白さを感じられるようになります。

時には、季節を感じるために近くの公園へどんぐりを拾いに行く計画を立て実行し、その後で「昨日、拾ったどんぐりで遊んでみよう。子どもたちはどんな遊びを考えるかな。」「アオムシを興味津々に見ていたから、チョウチョウの図鑑や絵本を用意しよう。」など、子どもの興味や関心に思いを巡らせながら遊びを促すなど、子どもに寄り添う環境を考えることも大切です。



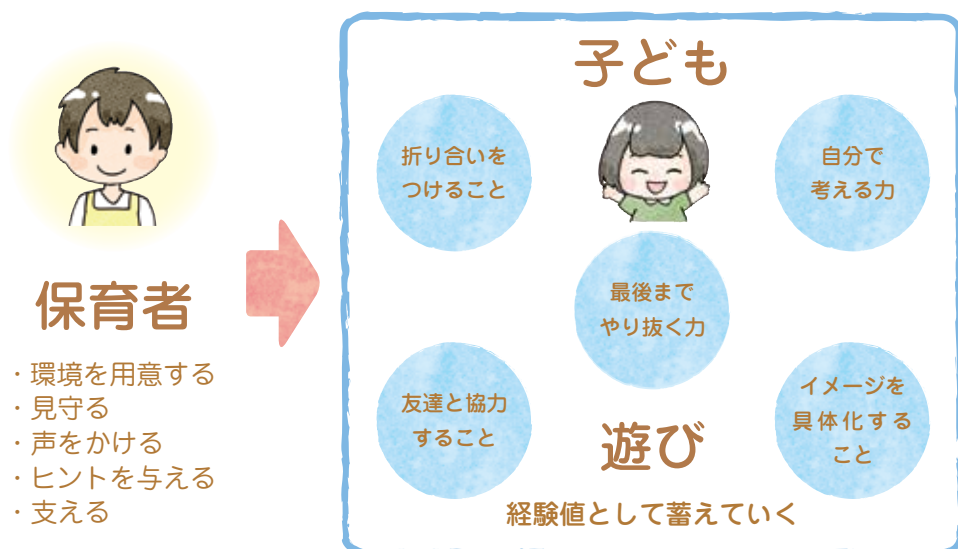
(2)「遊び」を見守り・支える

子どもの成長を見るとき、「縄跳びができた。」「字が書けた。」などの成果に目が行きがちですが、結果だけではなく過程を大切にしましょう。

子どもは、「遊び」を通して友達と協力し、折り合いを付けることなどを学んでおり、すべてが経験値として子どもの中に蓄えられていきます。この積み重ねは、友達とのトラブルが起きたときに「考える力」になり、上手に解決してみせるなど、時には大人たちを驚かすこともあります。

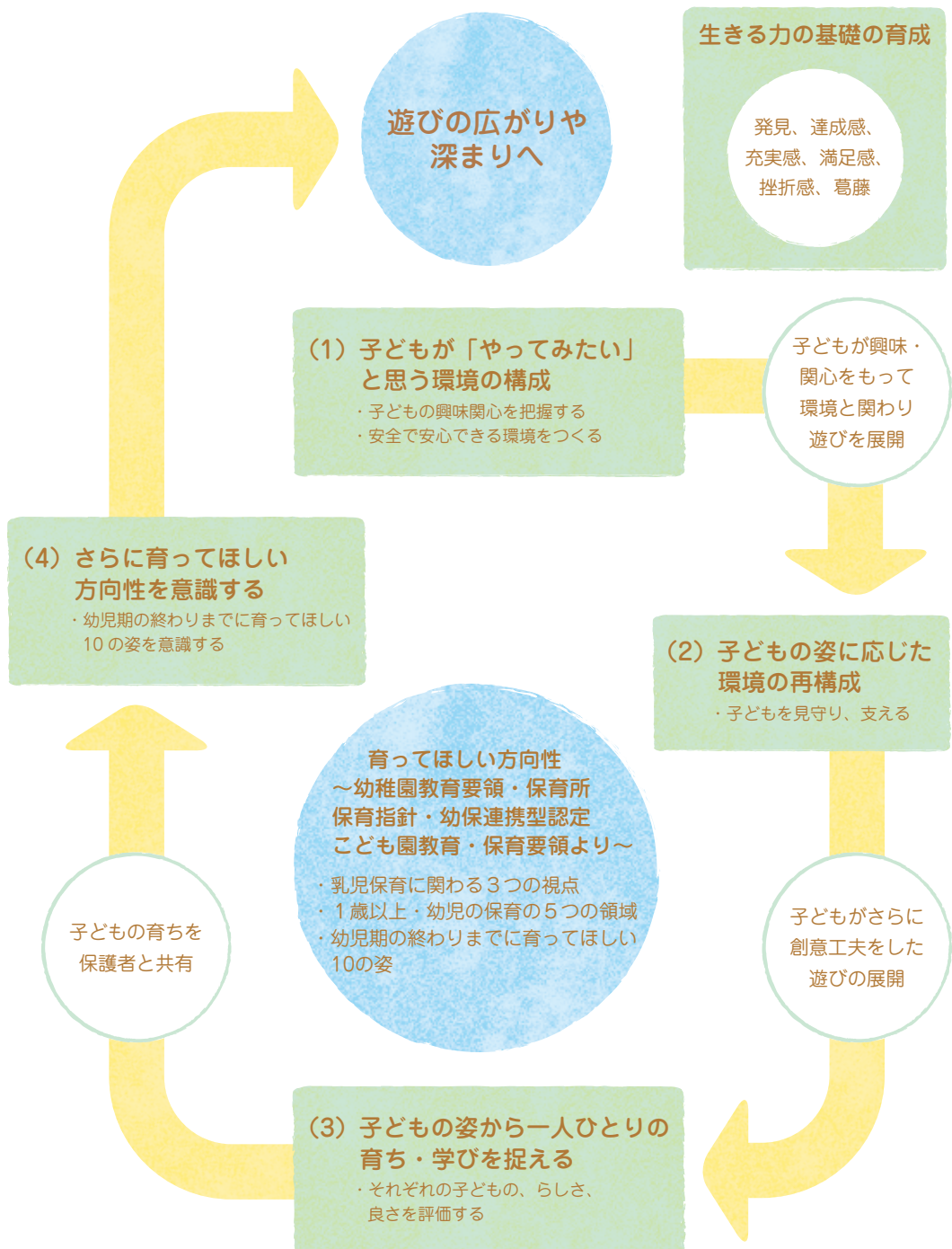
遊びが停滞して見えるときなどは、子どもが自分の考えをはっきりとつかめなかったり、イメージを具体化できなかったりしているのかもしれません。そのような時、保育者は子どもが何に戸惑っているのか、何かに気づいて考えているのか等その状況や子どもの思いを汲みながら寄り添い、話しかけてみたり、ヒントを与えながら最後までやり抜けるよう支えることが大切です。

子どもの成長・発達の「道すじ」を十分に理解したうえで、一人ひとりの成長発達や興味・関心の理解に努め適切な環境を用意し、子どもが「遊び」の中で何を楽しみ面白いと感じているのかを汲みながら、見守っていきましょう。



「遊び」を通した子どもの育ちについて（イメージ）

下図は、子どもが「みつけて・ためして、とことん遊べる」環境づくりと、見守り・支える保育者の援助が、どのように展開するかをイメージしたものです。



④ ゆっくり・じっくり、親子になろう

少子化や核家族化、又は地域とのつながりの希薄化や、育児経験の乏しさによる知識不足などから、インターネット検索に頼った子育てをしている方も見られるように、不安や戸惑いを感じながら子育てをしている保護者が増えています。子どもの健やかな成長には、子どもが常に安心して過ごせる場や親子関係が不可欠であることから、このビジョンでは、「遊び」とともに「親子関係」を大切なものと考えています。

親がありのまの自分を受け入れてくれる、好きでいてくれる、認めてくれると子どもが感じたとき、親が子どもにとって安心でき、信頼できる存在となり、子どもは自己肯定感、自尊感情を育んでいくことができます。

またこのビジョンでは、親子関係に悩む保護者に対しては「はじめから完成された親子関係などありません。親子の関係がうまくいかないからといって、親が最初から頑張りすぎる必要はありません。ゆっくりと親子関係を築いてほしい。そして、子どもとじっくり向き合ってほしい。」と考えています。

そのために、

「親子と向き合う」

「子どもの成長を保護者と共に喜びあう」

「親子と共に育つ」

ことを大切にする幼児教育・保育に取り組みます。

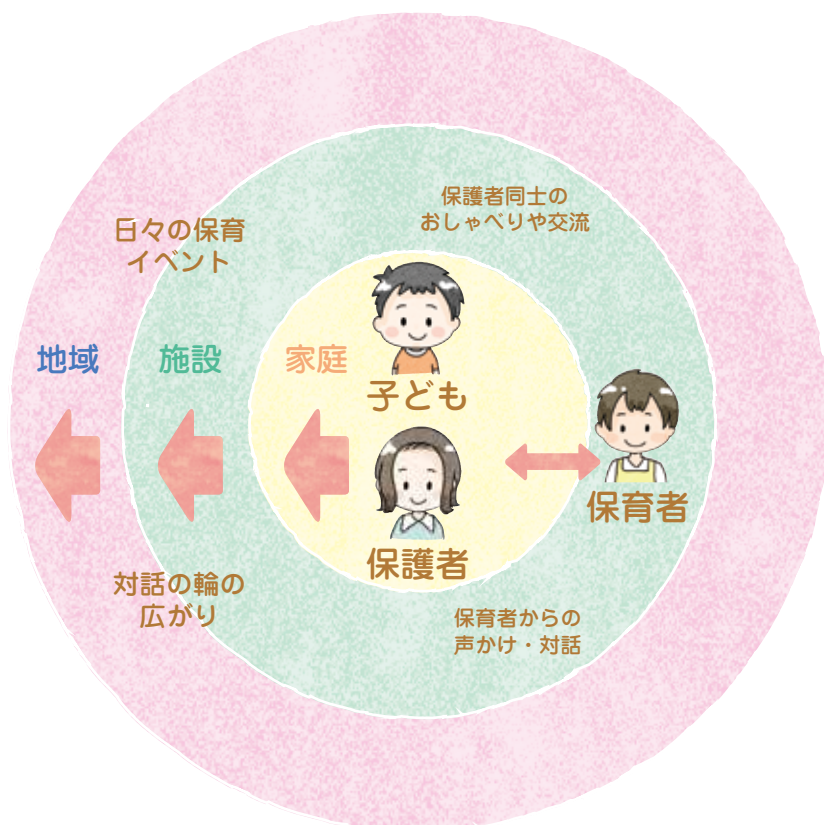


(1) 親子と向き合う

保育者は、保護者の不安や悩みに寄り添い、保護者の子育てを支援することが求められます。そのため、保育者は普段から保護者とのおしゃべりや交流の機会を設けるなど、対話の積み重ねを大切にし、子育てに不安を抱える保護者が気軽に話せる存在になりましょう。

保育者が、つらい気持ちを受けとめ、共感してくれる存在となれば、保護者は子育てに意欲や自信を持てるようになり、それが子どもにとっても、大きな力になります。

また、保護者が保育者だけでなく、他の保護者や地域と関わることができるよう、施設での日々の保育や様々なイベント・保護者同士の交流などを通して、周囲や地域とつながり、対話の輪が広がっていく環境づくりを目指しましょう。



(2) 子どもの成長を保護者と共に喜びあう

親子の関係が近づきすぎるとき、逆に保護者は子どものことが見えにくくなる場合があります。例えば、他の子どもの変化には敏感でも、自分の子どもの成長には気づきにくいこともあります。

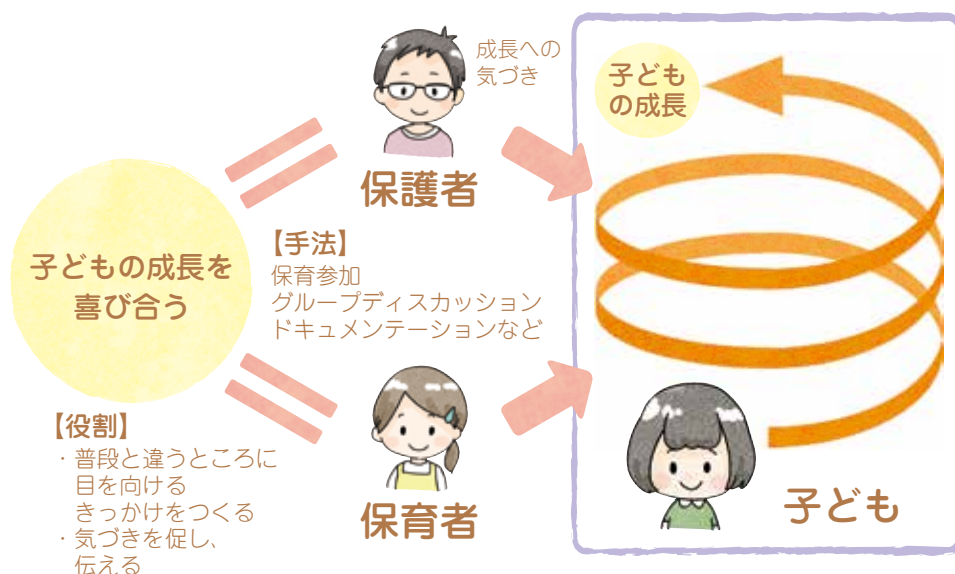
保護者が子どもの成長に気づき、喜んでいけるよう、その気づきを促し、伝えていくことが、良好な親子関係づくりにとって大切です。保育者という第三者が入ることで、保護者自身が色々なことに気づきやすくなり、保護者が普段と違うところに目を向けるきっかけをつくっていくことが可能となります。

そこで、

- ・ 保育の様子を紹介したドキュメンテーション※等による情報提供を行う
- ・ 保護者が保育を体験する「保育参加」を通じて、子どもと向き合う
- ・ 「保育参加」後の保護者同士によるグループディスカッションで育ちの理解促進を図る

などの取り組みや、機会づくりを進めましょう。そして保護者と共に子どもの成長を喜びあいましょう。

※ 子どもの経験や活動のプロセスを視覚的に伝え共有できるよう、写真や図、コメントを用いて表すもの。



(3) 親子と共に育つ

保育者は専門性を持って幼児教育・保育に携わります。保護者との関わりの中では、様々な相談に応じ、子どもの発達について説明し、必要に応じて保護者を支える立場にあります。

また、保護者と保育者との関係は必ずしも一方的なものではなく、お互いの関わり合いの中で、向き合い、影響を与えながら成長していきます。そうした面から、保護者と保育者はパートナーの関係にあるともいえます。

すべての親子と保育者が共に育ちあいながら、豊かな関係を築いていくことを大切にしましょう。

